

学生ボランティアとの「共／協働」に向けて

川中 大輔

特定非営利活動法人ブレンヒューマニティー

副理事長／ボランティア委員長

< 学生主体の NPO 法人で >

私の所属するブレンヒューマニティー（以下、当会）の特徴の一つは、学生主体の NPO 法人であるという事であり、登録学生ボランティア数は 150 名を越え、常務理事の 9 割も学生が担っている。

本稿では、この特性から「学生ボランティア」のコーディネーションに照準を当てたい。

一体、学生ボランティアの受入に何が求められるのであろうか。その事を、現役学生ボランティアの活動動機の内実は何なるものか、ボランティア活動というものが学生に働きかける力はどの様なものか、組織のミッションとの関連性は何か程のものかという問いなどから抽出したい。

社会価値の多様化により、これから増殖すると考えられる学生ボランティアの様々な「場」への展開の中で、より良い関係性を築き、「共／協働」が行なわれる際に、本稿が各種のボランティア・コーディネーションの一助となれば、この上なく幸いである。

< 学生ボランティアの「現実」 >

前節の問題設定に基づき、その実態の分析を今回はアンケート調査（以下、「ボランティア意識調査」）の実施を通じて行なった。その詳細については、今回紙幅の関係もあるので、残念ながら載せられないが、中々に興味深い結果を得られた。そのファインディングス（知見）をまとめていきたい。

社会学者の阿部 [2000] は、ボランティア活動を、人々が「ハマる」現象の代表的な例の一つとして捉え、コミュニケーション欲求の観点から、学生によって様々な形で実践されるボランティア活動は、日常的な自己放棄を通じてコミュニケーション欲求を充たすもの、つまり他者とのコミュニケーションを図ろうとするものであると指摘している。

実際、当会「ボランティア意識調査」では、約 60% の学生ボランティアが活動を通じて得られるものは「出会いと交流である」という結果が出ている。学生ボランティアの中には、他者と「つながる」空間の獲得という目的も持って活動している者が多いという事の証左であろう。

一般にボランティア活動は（特に社会福祉系ではそうだろうが）組織のミッションや事業内容へ「共感」して、行なわれるものであろう。しかし、学生のボランティア活動はその類のものと何らかの差異性を有している事が言える。

しかし、だからといって学生は、組織のミッションへ無理解なのかということもそういうわけでもない。前掲の「ボランティア意識調査」によれば、ミッションを文言化できる、他者に説明できるというレベルまで理解しているボランティアが全体の34%、何となく(個人で)理解している者が49%おり、全体の8割強のボランティアが程度の差こそあれ、「理解」していると自負している。ただ、当会の場合、事業内容が明確なので、ミッションは「何となく」のレベルであれば、広がりやすいのである。事は勘案しなければならない。しかも、この理解は関わった年数と比例関係にあり、関わり出した初期段階でのミッションへの理解は概して低いという調査結果が出ている。

ミッションへの理解は、当該団体との関係性において大きく左右されるものであろうが、(学生)ボランティアがミッションへの理解をしないまま活動に従事するという事は、社会参画への視点が抜け落ち、活動全体の社会性の低下へと結びつく恐れがあるので、気をつけなければならない事である。

その様に考えれば、(学生)ボランティアとの「共/協働」には何が求められるのであろうか。

<学生ボランティアのコーディネーション>

前節のファインディングスに基づけば、学生ボランティアをコーディネートする担当者が気をつけなければならない事は、巡[1996]の示すボランティア・コーディネーションの主な5つの機能だけでなく、ボランティアの「意識のコーディネーション」の位相についても、積極的に取り組まなければならないという事である。この取り組みの中で、初めて「共感」が創出される場合もあるのである。この事を忘れては、学生/若者、受入団体双方にマイナスの結果を生む事になる。まさしく「共感の(ボランティア)マネジメント」が求められる。ボランティアに「ミッション」を共有してもらう事が、安定的で継続的な関係性の構築に不可欠となること、組織内創発性の向上へも繋がることは既に言われてきている事であろう。

しかし、ボランティアの「意識のコーディネーション」だけで、学生との「共/協働」は可能なのであろうか。ボランティア側のミッションへの理解と同様に考えなければならないのは、コーディネーター側のボランティアへの理解についてである。

学生は、「おとな」と時間の流れが全く異なるということ、学生ボランティアと「共/協働」する現場は意識し、それを受け入れなければならないと私は考えている。学生は、学事日程が大きくその生活を規定する機会が多いことは、周知の事であるにも関わらず、ひとたび学生以外の方をも含む「ボランティア」という大きな括りで、コーディネーターが考え出すと、その事が考慮されなくなる場合がある。つまり、学生にとって試験期間は、ボランティア活動をすることは難しいし、逆に長期休暇中は期間限定ではあるが、極めて強いコミットが可能である。

定期的に関わることができなければ「気紛れ」なのか、「無責任」なのか、はたまた「使えない」のか。否、それは違ふと私は考えている。個々の学生ボランティアの生活を鑑みて、学生以外のボランティアとも巧く調整をして、「おとな」と生活時間のズレがある学生であっても関わられるよう、配慮のあるコーディネート態勢を持つべきではないか。

こういった意識や配慮が無ければ、学生にとっても活動しにくく、また、現場スタッフにとっては

「使えない」リソースだという認識が生じ、非本質的な齟齬が生じてしまうであろう。

< 学生ボランティアとの「共／協働」に向けて >

現在、当会ではボランティア委員会という特別委員会を設置し、独自のボランティア・マネジメント・プログラムの策定に努めているが、本稿で指摘した点を中心とする「学生ボランティア」の特性を踏まえた上での、必要な配慮として布置されている実践例には「ボランティア・ナビゲーター制度」が挙げられる。これは、コーディネーターがボランティアを一括管理するのではなく、ナビゲーターと言われる先輩ボランティアが、出来る限り自らの生活時間に近い、新規で来る学生ボランティアを個別で団体／活動への「導き」を担当して行なうというものである。また、これはミッションへの理解を徹底する為にも活用されるものであり、つまり「意識のコーディネーション」をきめ細かく行なうものでもある。

冒頭でも触れたが、これからの時代は、これまで「学生」と協働した事のない組織も、その必要性にせまられる可能性が生じる。その際、これまでのボランティア対応だけでは、時に混乱を招くかもしれない。しかし、若者の力、それは物理的な力などでは、その評価が収まりきらぬ有用なリソースである。特に若者の持つポテンシャルとしての創造性は、多くの団体にとって、魅力的なものである。

学生との「共／協働」へ向けて、その特性に見合う「意識のコーディネーション」を行なう事、そして受入団体が「おとな」と異なる生活リズムを持つ学生個々をしっかりと受け止めることが必要であると言えよう。

学生ボランティアとの「共／協働」、そこには準備の為に費やすリソースを遥かに上回る価値がある事は間違いないと私は確信している。

主な参考文献

- 阿部 潔 2000 『日常の中のコミュニケーション』北樹出版
入江幸男 1999 「ボランティアの思想 - 市民的公共性の担い手としてのボランティア - 」
内海成治・入江幸男・水野義之編 『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社
巡 静一編 1996 『実践 ボランティア・コーディネーター』中央法規出版

参考文献

- 金子郁容 1992 『ボランティア』岩波新書
川北秀人編 1999-2000 『NPO マネジメント』(第1号、第2号、第9号) IHHOE
平戸潤也 1997 「『震災後』に見る『原』社会の模索」
町村敬志・西沢晃彦 2000 『都市の社会学』有斐閣
宮台真司 1998 『終わりなき日常を生きる』ちくま文庫

< 当会関連資料 >

川中大輔 2001 「人材マネジメント」 阪神 NPO サミット 2001 分科会配布資料

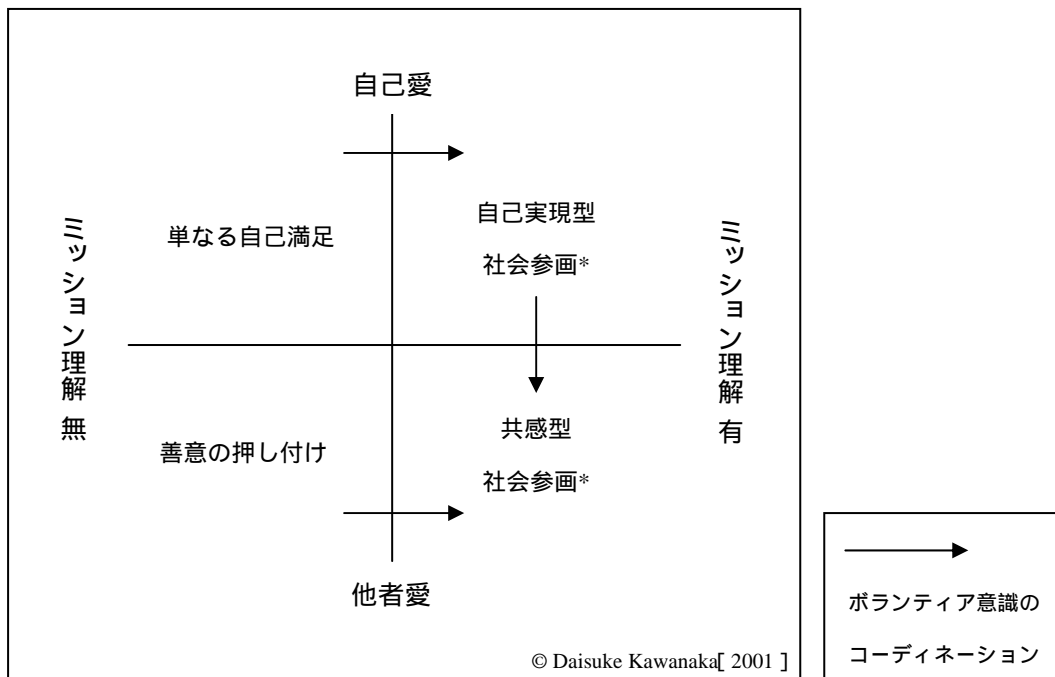
ブレンヒューマニティーボランティア委員会議事録 (2000 - 2001)

添付

大阪ボランティア協会発行 『月刊ボラティア』 364 号所収

原稿「学生ボランティアとの『共ノ協働』に向けて」

< ボランティア活動の諸層 >



[註]

*このマトリックスは、NPO が社会性を何らかの意味で有していることを前提としている。それはつまり、NPO とはそもそも、新たな価値の創造 / 提供であったり、現況の社会問題の克服であったりを大きな目的としているべきもので、その意味で民間公益団体的なものである。この前提に立てば、NPO 活動は広義の「社会変革」を促すものである。故に、そのミッションは社会性を帯びたものであるし、ミッションを理解した活動は「社会参画」と位置づけられると考えられる。